

グリム童話『二人兄弟』

おとぎ話、あるいは昔話と聞いて何を連想しますか？お城とお姫様、白馬の王子様、それから魔女やこびと。中には、竜を退治する勇敢な若者の姿を思い浮かべる人もいるかもしれません。今回ご紹介するのは、王女さまのために竜を退治し、そのほうびに王女と結婚するふたごのメルヒェンです。

実は、グリム童話にはふたごが登場するメルヒェンが全部で四篇あります。今回ご紹介する『二人兄弟』(KHM*60)、それから『黄金の子ども』(KHM85)、『忠臣ヨハネス』(KHM6)、『ラプンツェル』(KHM12)です。その中でも『忠臣ヨハネス』と『ラプンツェル』ではふたごは副次的な登場人物に過ぎませんが、『二人兄弟』と『黄金の子ども』では、ふたごの兄弟が主人公として大活躍します（この二つのメルヒェンのテーマは非常に似通っています）。

グリム童話とは、ヤーコプ・グリム（1785-1863）とヴィルヘルム・グリム（1786-1859）というドイツの兄弟学者が、当時盛んだった「民衆の歌謡や昔話にこそその民族の本質が現れている」という思想に従って、聞き取り、編集・出版したものでした。1812年に第一版第一巻が出され（第二巻は1815年）、次々に修正された後、最終の第七版が1857年に出されました。これは先ずイギリスで大評判を取り、それから世界中に広まって、やがて日本においても代表的なメルヒェン集として、誰一人として知らない者がいないほど親しまれるようになったのです。しかし、『二人兄弟』は『白雪姫』や『ヘンゼルとグレーテル』などの超有名なものに比べ、余り知られていないようなので残念です。というのは、この「二人の兄弟」という主題は、紀元前千三百年前のエジプトのパピルスに書かれていた物語にまで遡ることの出来る、古い由緒あるものだからです。ちなみに昔話の研究の世界では、アールネ＝トムソンの類型に従って、「竜退治」という大類型の中の「ふたご、または血を分けた兄弟」というものに分類されています。

それでは、グリム童話の中でもかなりの大作なのですが、この『二人兄弟』を簡単に辿ってみましょう。

昔あるところに、仲の悪い兄弟がいました。弟の方にはふたごの息子がいました。ある日、ふたごたちは兄、つまりおじさんの家の台所で丸焼きにされている鳥の心臓と肝臓をつまみ食べました。実は、それはそれを食べると毎日朝起きるたびに枕もとに金貨が出てくる不思議な鳥だったのです。兄のおじさんは、これを知って怒り、あれは悪魔の仕業だからふたごを家から追い出さなくては大変なことになると弟をおどしました。こうして、ふたごの兄弟は森へ捨てられてしまいました。ところが偶然心の優しい狩人が二人を見つけ、親がわりに育ててくれることになりました。やがて二人は立派に成長し、一人前の狩人になる試験にも合格したので、広い世の中へ出て行きました。旅の途中、撃とうとした動物たちを見逃してやったので、お礼にそれぞれウサギ、キツネ、狼、熊、ライオンの子どもを一頭ずつもらい、お供にしました。

さて、いつまでも二人でいては未来が開けないと思った二人は、別々の道を行くことにしました。そこで、養父がプレゼントしてくれたナイフを一本の木の幹に突き刺して、それぞれの道に進んでいきました。それは、ふたごの状況を知らせてくれる不思議なナイフで、それぞれの面がぴかぴかのうちは二人が共に元気であることを、曇ったり錆びたりするとその状況が危機であることを示してくれるのでした。こうして弟の方は、ある国にたどり着きました。そして、王女がまもなく竜に犠牲として捧げられることや、もし、竜を退治し、王女を助けたなら、王女と結婚し、国をもらえることを知りました。

弟は、動物たちの助けもあって、竜を退治し、その舌を抜くと、王女がくれたハンカチに包みました。王女は動物たちにもお礼として首飾りなどをやりました。ところが、戦いで疲れた弟と動物たちが眠ってしまうと、様子をつかっていた大臣がやって来て、弟の首をはねてしまいました。そして、王女を脅し、自分が竜を殺し、王女を救ったことにするよう強要しました。城に戻ると、大臣は王女と結婚することになりましたが、王女は懇願して結婚を辞めようとして一年後に伸ばしました。

目が覚めた動物たちは、主人が首をはねられているのを見て怒り、悲しみましたが、ウサギが何でも治す草の根を取ってきたので、無事弟の首は元に戻りました。弟は悲しみ、動物たちを躍らせてその日の糧を得ながら世界を放浪し、ちょうど一年後にあの国にやってきました。そして、王女が悪い大臣と結婚式をあげることを知ると、動物たちを使って、首尾よく結婚の宴席に着くことになりました。弟は、竜に舌がないのはおかしいと王女のハンカチに包んだ舌を差し出したので、大臣の悪事は露見しました。こうして、弟は王女と結婚しました。

ところがある日、新婚の弟は狩に出かけました。森で素晴らしい牡鹿を夢中で追っているうちに夜になりました。火を炊いて野宿の準備をしていると、魔女がやって来て、火にあたりたいと頼みました。動物たちが怖いという魔女の言うとおりに、小枝で動物たちを叩くと、弟も含めてみな石になってしまいました。

さて、ふたごの兄の方が弟の様子を知りたいとあのナイフを見ると、片面が錆びていました。弟に危機が迫っていると知った兄は、弟を助けようと旅を進めると、弟の国に着きました。兄を弟と思った城の番兵は、森で亡くなったかと王女が心配していると告げました。兄は、弟に成りすました方がよいと判断し、王女と二、三日過ごし（同じベッドで休んだのですが、間に剣を突き刺して、誠実を守りました）やがて森へ出かけていきました。森へ行くと弟と同じことが繰り返されましたが、兄は魔女の言うとおりにせず、魔女を捕まえ、石になった弟や動物たち、そして他の人たちを元通りにさせました。二人が魔女を罰すると、森は開け、城が展望できるようになりました。こうして、弟は無事に城に戻ったのですが、王女から兄と一緒に寝たことを知ると、嫉妬のためにかつとして、兄の首を切り落としてしまいました。しかし、すぐ我に帰り、とりかえしのつかないことをしてしまったと嘆きました。すると、ウサギがなんでも治すあの草の根を持ってきたので、兄は生き返りました。弟は、王女からベッドの間に剣が置かれていたことを聞くと、兄がどれほど誠実であったか知りました。

メルヒェンの中にふたごや兄弟が出てくると、心理学者たちはすぐに一人の人格のいろいろな面が映し出されているのだと解釈するのですが、ここではあくまでも二人のふたごの物語として読みたいと思います。

まず、一つ目の特徴として、ふたごが出てくるメルヒェンでは金が大きな役割を持っていることです。『二人兄弟』では、肝臓と心臓を食すると枕もとに金が出てくる不思議な金色の鳥が登場します。また、『黄金の子ども』ではふたご自身が金です。もう少しきつちりと研究してからでないとはいえないのですが、これはふたごが稀で、尊い、大切な存在であることを示していると思われます。つまり、これらのメルヒェンではふたごはよいものとして肯定的に考えられています。ふたごが脇役に過ぎない『ラプンツェル』においても、結婚の祝福の象徴としてふたごの男女が生まれますし、『忠臣ヨハネス』では、ふたごの血がヨハネスを生き返らせます。

次に石化です。これも四篇すべてに該当する問題です（『ラプンツェル』には直接出て来ませんが、グリムが参照した元資料には石化が出て来ます）。『二人兄弟』では、弟は愚かにも魔女の言うがまま行動して、自分と動物たちの石化を招きます。また、『黄金の子ども』では魔女のペットの犬を怒鳴りつけて、やはり石にされています（昔話では動物を虐めると必ず罰を受けます）。石にされたふたごは、どちらの

場合も新婚ほやほやの花嫁を一人にして森に出かけたのですが、花嫁を忘れて狩に夢中になるなど、まだ内的成長が足りないのでしょうか？そして、この試練を経て成長した後、ようやくまたもとの姿に戻してもらえるのでしょうか？もちろん、その場合も成長はふたごの協力・強調の中で達成されるべきものに違いありません。また、石化に関しては、人間はもともと石から生まれたのだから、石は人間の本質、いのちを表すという説もあります。あるいは、石にはものの本質的な姿が隠れていて、たとえば彫刻家はその真の姿を彫り出すまで待っているといった見方も出来るかもしれません。いずれにせよ、ふたごが石が結びついていることは、ふたごが人間の本質やいのちといったものと密接な関連のある存在であることを示唆していると思います。ちょうど、現在の遺伝学や生命倫理がふたご・多胎の問題と密接な関係にあるように。

さらに、生命標識についても触れておかななくてはなりません。これは、ふたごが登場する昔話によく出てくる対偶者の運命を知らせる道具です。『二人兄弟』では養父がくれたナイフが、『黄金の子ども』では二本の金のゆりがこれに当たります。もちろん、生命標識をふたご間のテレパシーと解釈したがる向きもあるとは思いますが、しかし、僕は現実的には、むしろ対偶者を常に見つめ、お互いに配慮しあう関係を象徴していると考えたいと思います。『二人兄弟』の場合のように、たとえ離れていてもお互いの状況を気にかけて、それでいてそれぞれの道を歩む姿を。

最後にメルヒェン一般との関連で一言付け加えておきたいと思います。先ほど、グリム兄弟は『グリム童話』をゲルマン民族の本質的なものをそこに見るために収集したと書きました。事実、民族主義の時代に、グリム童話はゲルマン的なものを強調・賛美するために利用されたこともありました。しかし、グリム童話には、フランス系の移民の子孫から聴き取ったものが多く含まれ、純粋にゲルマン的なものとはいえません。むしろ、メルヒェンとして、世界のいろいろな国の昔話と多くの共通点を持っています。同じように、日本の昔話も世界の昔話と共通点を多く持っています。つまり、メルヒェン・昔話には、その民族に独特な色合いと同時に、世界中共通した要素が含まれているわけです。それは、同じ遺伝的要素と同時に、それぞれの個性があるというふたご・多胎児（特に一卵性）の特性と似通っているのではないのでしょうか。

* KHM とは、グリムの編集した『子どもと家庭のためのメルヒェン集』の略号で、その後の番号は、第七版における番号です。グリム童話の標識として世界中で使用されています。

『完訳クラシック グリム童話』（池田香代子訳）講談社（全5巻）、『二人兄弟』は第2巻。『グリム童話集』偕成社文庫、同じく第2巻（大畑末吉訳）

『グリム童話集』（高橋健二訳）小学館（全3巻）、同じく第2巻

『グリム童話集』（金田鬼一訳）岩波文庫、同じく第3巻。その他、こぐま社、角川文庫、筑摩書房、ぎょうせいなど翻訳は多数あります。

小澤俊夫（編著）『昔話入門』ぎょうせい。著者は、昔話研究の世界的権威で、小澤征爾のお兄さん、オザケンのお父さん。昔話研究の入門書。

河合隼雄『昔話の深層 ユング心理学とグリム童話』講談社α文庫。

バウアー『子どもの心をいやす魔法のメルヘン』（池田、鈴木訳）主婦の友社。

『ツインズ』45号（ビネバル出版）から転載・修正